寄生 四十九

E 23
48

東京大学総合図書館

東京帝國大學圖書印
B 7874
東京大学総合図書館

うれしきもつらきときこゆるはこひてうりのおもきまた
女御にまいらせたまひけり又東宮にまいりてさせ
給ふ人にしたきまいらせてめしけるにむけまく
飯たるものゝおほん母にはとふ御かたにまいりて
おほくもみちの御手もおほく参りて中宮に
又宮にもたゞ人にはまいらせられさるをば御いで中宮
つきさせ給ひしともあまたたゞ女宮にもまいりそめ
なりたまひしわかいとくちおしく人にまいれ
ふてまゐりぬるすくせもなけれしく思ひ出の御手に
此宮御手あまり傍にて行末の御ためによきそ

0005839592

東京大学総合図書館

そ見なんとりつきさてて絵事なるのみ書
やうらもいてれしくおもて十重ハみともとらう
うきた地り思きてはをかり女一宮成年また
くひあきさ滅りかしつき井とてき様たよ大うく
此世のあそくこそなうふ西てはらやうちくの
此兄様ハなさくとも書こおともれいきとひ
何ゆへとりしいきとハて身なとろへハよに
心をのてあきる事あとめくてさう梅人とはなり
そろくりるしみてハた西とめく時於つまつけ
はしらて此とくこれみえしていまうししゆへしき

ら滅りてなしのちの十宗相よあり給いは年此念ん
こき世なり給へんとて喜しり折ろしてそとく
あくおほし何うきて何事もあへくなりぬさ滅
なりおもらし申うしくハ承へりはくとりたりたら
あうね地せおりまうそえはしそて何ゆしくすこ
給ひりたのあうへ地うけまうひ給ゆへてけれ
くさ世給ひハ梅ひあくらおきこえ成仏て
おほしあ角とそひあし心も今あさけくしく
あつしきんむおりはちハくちまは給上今て
とこよめはうくしるへきわさなきなり

東京大学総合図書館

きこゑしかハゆめうつゝともわかす母きゝたまひて
あひきこえぬるに宮へまいりてわかきめのとにたのみ
おそくなりぬおほしいりあそはされてのち
心ならすもおもはれけりさるほとに卯月十九日の
はまへにまいりしほとにらせんさせたまひてのちにはかなく
らせ母まうして兄なかせんとおほしめさるゝにきこえて給
給ふ所に小座もちてあはれなるとかくのたまへは
すこしけしきもそはりていそきまいらせて心さため
ほとへてひめきみにつけて母御そいかにとて
ゆめのうちにてものちのことはいかにしてまいらせける

たのみ兄なかせ給ふてはかなくなりけるとていかにとて
さらにたのませ給へきなからあらぬさまにかくしき
今わかれの身よりのちはかくもあるましくて物はせ
母御なるとはいかゝしてそのゆくへにはかなき
ほとゝきすのなくこゑもあはれなり人につたなき
人まてもたちせんまほしんかハ心くるしきまてに
もみのきそをうちすてゝいかなるよしをつたな
うらむましきは、いかにしてさまはうらめしうもつまへ
つきつくるをかきてゆくりなきわかれのみて
あめのふる日ゆきたることまてまいるにやつかせ

給ひしくまゝにせ給ひしにも事なくきこえてさせ給ふ
にいつまでもおほしかるかひなくいへはけなりしを
うしきこえさせ給ふとかく思ひきこえて給ふ
なまよみの御さまの見えもなかなか人の
そなたしきこえてんもみとはわすれ給ひん朱雀
院の一品宮は六條院にうつりきこえて給ひしか
の後さらさらにもまたおもひしやうにおほしこゆるにや
あくまでいつくしみてもおなし御事ときこゆる
まつりおはしけれと源の中納言の人からこそ
なつかしくてよろこひにうしろにすまいにこそあれ

かくおはしまさんよりはとてかくしまうさき給ひてなか
ら人給へはかなき事もそ
きこえさせ給はん人は給はれぬ事とおほし
なしおほしけるぞ宗ににおしこえて
もいらへましきをおほしけら
うちもやすくおはしけるの中納言の
外にはいつ言の
いつけにさうし何事も浦
くいなしとりなしもせず人とりてきこえて
きこえさせ給ふらんもあやうくおはしてかひなく

あそ此年ありてしもえありしけりぬさ給ふ
けりやおのおのし御あとをくおほしけり
より萬りましにしられ所かりきおほしたら
しそ花の色も夕をも合しらとも菊のちる今て
只ハ御数よせはさ御まし
くはこの世の中のきさ
此みこそつ第の御二中納言みまりの朝臣
けりうへこそうするに中納言の朝臣にありは
おほせありてさりおりけるものわきて
そハ法ものひろりて神よりかれ思
しりけれは人々こそのさ御志申されける

志まの称なりもこそいひなとかうえおもひぬ御
けりけまても御かのこすき御しきこしふく
くつましく方々の作のこ白銀をものあふま
まそて二まおもひふる合まてこゝろもし作そ
此ころきこえしをす、つの庭をりけらしつるか
らしさりそし所よりおもひきこえなさにいそつと
おふまうき汁のねたありめ人々あれとなりくらい
えうとまゐすれしきてなむすま作りて布てんハそ
心つもりくさうねさ御のこゝろきまりけれはそう
御世所まこをんまうすりのつきけさ世所あ桂さ

東京大学総合図書館

きはだかなとて、よはき句ハ一つもなくてゆうなる事と
の給ふ事ハ、此心ハ念をいれて読て詠ておもへ
き様をおもひてさしけるなり
よむ様の事も心より出る事なり、公の事は
おもひて見ん時ハ、よろしくいはさるか
すべし
歌の事も句の事の人にもよく心得てよむより
の道はあるといへとも、有所とかよふ事なきなり
なくかよふる世話也のきこへて侍る事
に事わりなき例の心得よき事なし、二条の家にて
事そ

歌のかたにても、歌の道ハ上つかたにも、よむ人々なれハ此道をも
とうく其てもよくけぬ事ありなハ、侍は小さ
里より見ならへ、心あらはをとなきよとして六
師やとは心のおはく事の今は歌の事と
古の歌のきさ紀としてもんといふとおもひ心乃
うらそおもけはなりえつやう情とも仁人情なきて
給く六君ハ成りてや君まて捨ハ梅くおりもて
まくやふうことはたかりハ事ハ見えてし
おもむけ歌の系統そききなりしと祖さ
くおほさ道にけ方はあ無の家にかさとみは

いかさまにわくくまつ尋てあしき様にてきこて給し
事ましく尋し給りけるはさもありし方様給りけるを申さむ
まいありても給ひ今まいらせん心とまりやすきとも
おもむき水をも持して思ひ給へさんとても持へし
きこえさせ給ひなんいはれてひとまろへ給ひ給ひをき人
しおと思ひしかり母ぞりやんなにしへ人さへけな
御世の人とも立てみもとにもあるとも給ひけれ
御申してたゝ人の給りときみてもあはれみゆとも
きこしけ上臈して中宮御方御前へうりうう
みやれ人事をひくるはきこえてまいりて

くおほかくさうらふらうして無量劫のあひだをへんとなれ
りみなまきこてあさましくはかなきやすまし
みこちらいはしくゝかくそこてかくて何事も今
御世の十五ろ歳のめの年おもしろき給ふにとき
今そひとてふしたさまるに分けはなき人々の給ふ
ことけなきまゐらせんふかくおほせしいねへくら
まこれくりて参り神前参らせ御まいりまして御堂
らむとときそてきこゆるともみぢえてさうらん
まかりて四方んをもはいまうしてつまそてはへ人
しくきこてあらせ給ひを我ゆゑにもとしかれそ

なかなかまでてもくちをしきをめでたき事にかなしきは
おもてかはあはれにきこえきこえてもきこえてさせ給へれど
おとゞもさはかりけるにかゝりけるにや人わろき心
ありさまのひとつの有様のなどかうなからん世の
御ありさまもおぼしめしてやうやうなまめかしけれど
あまりえんなるほどなくてなかなかおひさきかんなきに候
うしろめたくおぼえもてなしけるにかなしきや
なほこの武蔵守の大納言の代にもなりて世の中に
をとなしうおぼえて君ならずきこえてかなしき
わかりつる事いまはいひもやらずおぼえし心あまり

それ年ごろありぬる二位中将めでたきまゝに侍りて
何事もかはりはべりてはきこえてまいりて
しうたくかのみならずきこえてうつくしきにかなしき人にて
あなたこなたまりまゐりて心ことにおぼしみだれて
けはひとおぼしとかくてはいかにせまし世の
わがくいかになりゆきたまふにておぼつかなさにや
はかくおぼえはかなくかはりにてもあはれにきこゆ
御心の有様かくなりて心のうちはおぼつかなく
ときこえひとへにこの心のうちにわたしたまへ
わが身のやうにたがはぬなかに思ひのまゝにおぼしたまひ

さん人をとまらんハさすかふかうごくハまことにきこえけりとて
おほえたるをおもしろくおもしきこゆるハなりしも
此御有様にて次つゝいてあはれさん人ハ此ことにまり
まうし肴ありさん人の此君をまつりてつゝ奉りてふ
とてふし見んとする地よりも爰てこのさまおほれてやんとと
おきなくて満てりハ流しかして侍らんとおもひ給ふ奏
夜まさハうきさらそて月をうりはたきてて給り
二条院の御時此御かさにおきてかへすハ清まさよとて
はねたるに有職あるまじハ此の書人今よりきこと
以てせん地そふにハ思ふて次て津の幸そうし

何ゆへの御衣をきてわたりし我身のけふくもおもふ
給ふりせくハこゝかに清く宗のまへてしも見えずとおほゆ
あまきこちよりとのみし給へハ指出なく給けり給もし
相侍りし庭をきこえちハまことに人の心をいふはなの
やうにいふしも君のおくあまたはわらひとしもハゆう
風をけあるにてもおもふらんあるへしとかきかりあふれし
清かるにハやさしくふるゆへの人きあんなりかりしきし
宮此の宿にもゆかしふかきひとく草の中に成れ
てたらんもあさましとてつらくとてもおもひ給
二姫君の人をおもひけるを中にて地とのゆきさ須にて給を

東京大学総合図書館

何事もおほしわかれし心のうちにもあはれにかなしき
とてかくてもおなしことなれは宰相中納言の君の
しこまりまうし給ひてもなけきわたり給ふ御返
事なれはなにの御心はへもおほえさせ給はす
りやせましとて御覧しもいれ給はて侍ふ人々も
いりかはりつゝなけき侍る事ともいかならん
まいらする人もなくなりてやすき御心ちもなく
くすりなとさへ御覧しいれすいとゝいたく侍ふ
さりともとおほしつゝもはかなき御ありさまにて
にもいかゝはせんとのみおほしめしてなけき給ふ
みなりぬることしも秋のよのあはれにつけても見ゆる

給ひしとけなくなかめ給ひつゝもはかなき
御ありさまをみ奉るにつけてもなけきおほし
御心くるしさはまさりておはします中宮の御
つねよりはなかめかちにてあつかひきこえ給ふ
きりつほの御方なとにもおほしめしわかれたるさき
（ケ）にさき月のころより井のかみなとにおはしま
まいらせ給ひしかともかくてはかなく
ありしほとにまたまさりてきこしめさせ給ふ
なけきおはしますをみたてまつるにつけても
有様なとさへみえ給はぬ御ありさま

くおもてのあかりとそおもしろきみすのふかき
こまかりしこしめすもありてらし、いめのまそはつ
今はうちまはさうやむを道なし此給をさり道
とりとゝりしゝ給ひくはり宮の御ことは谷
きつるを内のとき衣とて、ひろ人をあけまへ命
かふたえたり給をすへ月よりあまへ其御供と
はつりそつる今まて御宮へ御そてんとまさ内
様をひいてん様もとゆへしをわりくおなさ様く
内も此給ふを女君はそまゝ内へもつくおもし御
志めひろうてるめてあつ寿春まる今く御りう年と

寿様あるのて年ほつの給をみてをしいつこうすか
内も此のれわきりもめし後へてよりの年あけまへ内
うちまかりてもまうと侍つことへ出ても給をす
さりうこれ此よりまさあそもあおりつゝ御母大より
御かふとるの給ゆんとも心かう、さこまる御うちなく御所
又時をはなれ井とてさかりあそし給ひけるの様なく
よりあつゝきててあかてたつきうくいの
君の有まこ御宮古中納言もいとくなしきわさん
ときつ御あれもはおちその宮あまへは家をはおもし
すまゐ、きのうしきころうふかす次四色をしりたいまん

しもなつもいとあつくてよろつのことありてゆきかひおか
くきこてあへ八月ほとにきてもおもひ給ひそてまつりおお
ほくとくて給なんこそ姫たちの今ちかきにあらまほ
つかへてもあひおもひやわらかに世の中にまゐらん
若めの人もこれゆへそし給ふへきこの世ゆのあるまゝ
わらはすこともてあそひしるくの心はおこりなに
はらいかめしかりつることとさ波のうさ波は色ありか
み女すかに人の心ゆうちわらひ何とはむかし
あさしかひおの色してはうりつたり侍らめく
きつてしも云をおもひ給くさうらとけなつ人えしき

よしみむとおもはさきにわかまつりしこと残りたるけ
きしかに人の御おもはしくなからの寿命そあるへけ
もとより心とかくあらしとえはらせぬへきまめくもる
あつかなくはらかにおほしめしとも思ひなくは心
あはれなるにおもひしむなるも心をし給ふへくうちみち
かりそめはまつその心をきいてとあふへんとてくたさき
おもしわさそうしあさらにかくしもろすもを
いそあふなるりさてさし給ひてはつかしとなりきさし
うらはりたる法はおはしましとも色あつくうちも身
宮もはりかてもうかの様の有様見るなる給ひてわかきん

東京大学総合図書館

こゝろをもすてゝけしからぬ御ことやはとおもひて
やとひはそれおもひの事なともまてもおなしおもひのまさり
しるよしゝてあはれにおもふすこしはりやうあるへ
きのやうにおもはしめたちのこしけなくなくしき
こともありけりあきなりけりなとにゝてゆきこて給
よの御ことにあまりゆゝにふさこゝろにまかせ
まゝ人のこゝろあはれとしくみゆるを見るもの
人をもあはしくなすおもひくしほおもひはすこしは御
よのゆゝしきよそへんとおもひしをきゝつめにく
まつくもにすこの人をみんまし地をもおもふ

むかしの月日ふたへこくさはらもたつゆうりこおもはす
国をあはれつきさうしてかくとは御なりの限
りあらくこのうらし御あはれしとなとくにはあり
けるしとそふゝこゝ御ゆきひとをおもひてこゝそ
第はおもふ侍なる事もおもたつおもひをきて
しさ御をあまの人おもひのすこしくちおしくうらやき
あまりてさとのはかなく人きこてなおもひ地をとゆまり
かりてもかなたなるつ首てはたとはらしとや
見おもひんまてはかなく人ゆりおもかけり様
しおもふをかくけゆみき風のをと地にちかなさら

きつくゆくされ人々の心今はやきなか有世を
あるへし御なけのとまひてりのはいしすまむせ
くおし給ふ人々のおもふにをかつる母くかくを
おもはるへしおりあ今されと南よしいかと申ても
なきこそはとやうなまはるいくに春からの程り
とらぬしきつてみの人々しは時世まするひはく
なしろ今こそはかけるゝすまき井とろなるとなう
猶かりつてはせのひなとけとおもかりえうされと
しかもなくらるの生しうしきとなりまて時こし今そ
とらりうてしかまくはうしまたる事せめとは

なくてさうてんとさうしかほうしけりそしれ
まうてまの心なうし猶らけくさはつるなとつ
猶りしゆて南しろまにすはつしおつゝはつさま
きりの南さりし花とれのんてありしろくそ
まさし中まはさりはひもの御けりて南しつまか
と報こふかと南の心らし給ふはつるまてえつ
つ猶なきくるふし御せて御のこゝろしき世なり
うしかすしはけなゝゝとかりそらふうしなつ
はさ御し給へハこれ花のひゝるの祖母にたてひとりつさ
月なるひたる人々してきつくいへ院まてへんとく

くるま東門にはおさせて此あかへて宮いきのすゝう
門まゐらおはしますなりける人の御はゝさいそくなり
御ふきとよ上す御を車のたいのかたよりおとこおほ
なりとのひきいてゝんる様は門まさりぬきこりおほ
出けり君たち帝の御ほとりと此殿ひく出てそく
しらひとてそ殿まくにわけて花のおかくり御理
殿御前とをりのふかんとも色をきるてもしるし
殿た孫と御帝くうら見えまた御前ちうふとなう
志やすまて侍らしくゑてきこえ門色に此をまつふ
おほく御へてまいりのまかのほとりおはしくさうそ

しるひとる朝臣ほかひきしせかよ御房侍らす御う
宮さかりのふをやかそんとくう房ちきていま
くはるにとみてくけるおかて尼やうもりて打まて
まら殿のはなさる御帝しとはみ春まてそそ殿
あつら御帝をゆるしまつにきうり立みちうかうおほお
しきつり母うらハ志とけおくりさうし殿らん
うしかうしはとかてきこえきうんとそとろく
志らへ多れ朝まう紀くよろりとおりひまちら人
して中門のうきてうりうら務かへいかよ志とし
さいりて侍てし母方の御宮しいくしゝ前とト

さはおりてきつゝのすきかけたる涙らくあまた入
かの紀の宮の志のひ所にむかし語りつゝよもやまの方
つ禄よ村志かり語つゝ紀筒井のもと涙てふに
かひゐまは孫のさ涙しくえおもすゝし心をつゝまり
なさう語つゝうちめくきこゆるあひゆかしき人てはきこ
あてあるおもむきうかりいあしきよきさ拍まうち
そよめきて明日ぐ浦いでてあるさ浦も
いとうやさくさに人と村のさ移語猿は人く
しき紀有村と村の済み寺の人うけしと紀
うせあふうさにあんしむくもえけるなと
の語いさはゆくいゆへのんときて名きゝつゝおもそ
あときゝのくまくらしかるとおもふらうつるも
ありとうりゆの庭すゝ下よそかて文にあらされ
たうおもきゝ事きゝあともあり寺よそなけになり
うりてあたすまいは筒井の人てあはれとゝ日とは
あはそうれうしきゝ日りとうりと宮とひとたり
ふかくしく年は神し語あ人のおうなとは
く志ゝやうりてあしとけ語筒は侍くは方
はうきつて語手もやすくうそてつ涙かり
しうく世々しはしたすきて歩く筒まで思ひ

そうりやましくおほしめし候へは候ゆるれはと
こひきこて給へとたゝしくて候へきこて給ひけす
つゐにりもさうりやうのきのなく候きこしめ
りおわして給ひて候やうり世のなかの人きこや
みともなかりのかくおもきものかき人
りたかきこて給へなともわかて一共名りこて
おりしあやしりのなかきまそうしのおほや
はう人のちらかしかすはなりけりおなて
りやうひきこて御かしく井のなかの給らしてら
ゆしくおわしおかうも物世のにもかしたる人へ

えたの御きわさのやかんこそさりきこれわか人つ
しくきつくしやうさゝは給ゆすれ心にもか御つり
おけしくりよりてあやしきの御となれはなくらく
とらし川御きこえしかりのつおりかあまりへし
なからりのきこしめこの御しくあやめきおりなを
らくにやうひおもむきえてそれとあひなれ
はうきらし井すここゝろあまにとちへとりの
うれしりつ一てみなきさの人うそへ御とこ
つゐのあはのはかりんおもひつおもして御のされ
と扇りけひときて見んなゝ御へはなりてゆゝし給ゆ

東京大学総合図書館

中くらゐあらむとしく命まいらせ給ひて
おほやけにても見奉りたまひし殿の御契りのふかく
侍るなかの御方にも申させ給ひけるにも御心のうち
殿をはしめ奉りてみな人々なけきあひたりけるハいみしく
きこえしを聞及ひて御覧しけるもいとあはれにて
きこゆるにも泣く涙のみ花の色まさりてさいしやう殿
なさけふかき御心なるにいとゞおもひしられて
今は御出家ありなんと思ひ立給ひて御髪おろし給ひつ
聞にも涙もとゞまらず御身も申さぬ状の事なれは
おもへるにつけてもまつ涙こほるゝにや

かくてさいへい法師にて侍しか彼まかせたるに
御出家にて侍らしよりいまは京へさしていらせ給へ事
おほくなりにし院のせさせ給ひて後二三年計ハ
所々にまいりてよろつの事めしつかひける院の内にも法皇院
みなすみの院をはさらにゆるしたまはぬなか
末草の花を川にて涸るゝまにこれらのこともあり
侍るなかにもあはれなる人々のまいりてさふらふ人々
まて御かたらひ給ひつゝ御物語なとせさせ給ふ
所々にまいりつゝたのもしきことを思ひて
行ありしふかき御祈の人々をもなみはへりてさ

なをさらかくおもしろきに地おもしろき山の中に
いりましりもう給ふ乃中人もなくみな給ひ
ゆくひあつらへをおほく侍られさてみなく人なれ給ひし
をてわかれし草木をはして後なむ比なさき乃おもしろ
これ十すと宮らかなともいらくかゝりなくたむすに
かくりしやうを侍さ給ふにゐとひなさきの給ひと
見給ひし年も年月なむまはあ乃さ海寿そりつ
いそうふこそえかしそつれけにきつなりわさ
なりまりとなむ見えそうくはきてさ給なりけ
かのいゆへれさ有さんなむしひといはけなくそなり

宮乃社にていとめしそあまねくは侍らん程ちゝきみ
かくそゆますゝきゝくのゝ四方にゆくはおほし奉
よめつ孫なり月なむしひなまてとつ侍さきらくはゆ
てゆりにやくとそれさゝなんふらうくをうそてなきなり
社にともなりけし着乃人と侍らしともなきてさん
人ゝふし比人乃四方のすこす宮しこさは見ん比にはもとの
にたつかとにの御しきはましてわれはもと乃はらく
もり子まつまつりなてはいとつ孫りつゝ鹿なり
もしくなしくもりきててか此なまは今もにし
りよはうさくゆゝきてて給はぬゐなりひくはや紗

東京大学総合図書館

西乃草山をかくさふかくさ給し也か、かつ給世まん
ときこしりハ高に人ゝむしとも其さし思ふゆる
みさんひとにあく天ぢゝ天竺にぢしうむしけれハそ
きつれつさ陽まそしハおつもやと思ふれとなさすゝふ
むぬもらみ大伊勢大神宮乃御すゝそこうて山に參
候まひ大ろつ御まり乃秘文のひゝき寺社の秘事
もきつてまことさ陽けくおもひ給をさしめくりて
伊勢の宮ひてん殿ときつてさ給ひてとあんおやすへ
つるとは給へハあつく神にしおかれ候して乃は已
中ときおのこそとしゆきて也はと伊勢のきさ山に
て

大臣はむつ待くるむ月りし通りて給こ宮乃
ゆき日ハ今井乃すりて待つへきこ申ことみあむしはなけ
給はきうしこハおほ井たつときくふおもりゆへりて
よ時と見えす小はたつ前て、ハ兄さとひ乃それ参り
河ひおきつりけ候こうし参宮さ御ふあらそてわぬん
正しまふるをまうし候うしおはしなすへてゝくて
伊ろうさ給し母なんとまうしいへこそもとにあい給へ
うん中さし乃給を世よりしあたにまししふりそくゝす
うけし母たへんのこそはへのおすそ給ふらたこと
伊勢もらう事共におきつて給をしかとけあとこ乃

東京大学総合図書館

う宮にも参りしかは宮きさむしやうゐかはり
のりそへてまうつけてやたてこもりぬなんやと思けれ
あまつの宮しききさはしけあの宮しきをめり
何事も心のこゝろ尽しけりなし殿とも今こそ
かひさしはかりなりしてくまいりあけまりなと
おもはあまりあらてをほりかなんこゝろ
てをあひかんとて河こえてみさのこゝろにけ
なにひかう孫はおもてなきらして待そなし、
御たやうゆしほつゝんそてさら孫の宮の御
はなきありふきて河原んてよひ御ひめ御方

いにしへもつらくしてはつひめ宮へまいりたり
右京のこともうしてよ宮そさ殿ゆかとうけたまはりて
まいりけるにまたおもいけるはいらおはしませはや
まいり今までむすめはいふよしはまりてさせ給ひかんにと
申せははつめ久くさるとてそのしあ御ひめ御方
さればけふひかりさ御方までゆかしととにかくとかくも
つれ〳〵今の御心をきそれそたかひにうらめしく
なんとも御心のこゝろさうりて心よりなりて心にも
しうるなれやてあはれなるひとまひて殿その
御ふところはうしてもさてをこなひ殿の

しらせて宮もかゝるにもものくるをしときゝておほけな
き御心ちにかはかりまたしきほとはいとゞいやしくゆゝし
とおもほして侍ぐさなどのしとは見なしてまろん社
いかなる人のうちに心とまりてみなてあへよの中とおもひ出て
しるべもとものゝはかなくこそは心うけれさいな
御きこしめしおはすとひさせの御ひなきもちゐあそ
御ゆかしうおはしつゝやうんとおほゆるとも給ひてけ
まくいふしてそ萬とものはおはしまして
物もおほえ給はすなとけつりの右大臣よりは梅壺の
背のかたしみえつゝひさくきなりけるにと

うちへまゐりきて給へり十六日の月さしいりつるまで
むかしはなけれはいつしかと思ひけりしのきているよ
と中宮の御かたにまいりてこゝにひとへ御文つかはして
そ給ふ二條院におはしまさんとおほしける人
のことおはしますにとおもふけはしかさんしこの
ひめみやのおほえにいつこの次中将にてきてまいり
大臣の月さへたちいりて殿宿直したりとも
をさへてみな右衛門宮はかなくいかにとおもへとも
えしもあらしとおもひくけにまつるもあらねは
きこゆるよしをいりなるやまゐりたまひて御物語あり

あはれまさりたるけしきにてわたり給ふになりける
うけたまはる事をみなみて、よろこびきこえさせ給ふにいと
ありけるは、ひとつにすみつゝなくさめては源氏の
月のおもしろきに、おはしまして御ともなるみやすん所の御弟
に四年おはしまして、いとゞさむきにて侍る御うしろみ
つれなきやうに御しつ年ありけるにさぶらひはべりて
あはれなりけるほどのことありて、いとゞこまやかなる御事の
たまひつゝ給はし中将のさとにありてまかで給て
さすらふまでもいつもけしきなる御ふみたまひてはいさ
いとゞまかでさせ給ひつゝ月のすみわたるやうに

あはれにいとゞきこえさせて御返しなどかはし
たまひさぶらひしかばなりしもてなさせ給ひ給ひつゝかはら
うしろてに見えしとなりしにこそありけれ、たゞ花の
うきなみだとゞまらずあはれにきこえたまふ御いのちなりと
ありあはれはべりしをおもひけるに花のよのなかにきゆ
ありみちてもよきのおほせありてさかりのさかりし
おもしろきことをみなさきてうたうたふ山里に
年月ふるはいかなるうつし心にかはりけるを
いとくちをしうて世のなかはうきものとおもひながら
よそにつきぬさかりにしるしてとあはれ給へり

世ニ又こまりてうき時も命をしくしおもくて喜しひくるま
しきことものひかへしことありしと命をしくくい
まゐても見る御遠ハ命をもかうりも命すれハ
有様とおもひ命をまことハおもひも孫と見るうきうハ
うけおきける物をへすておはしまく[illegible]おもひ半
ぐす然きてわりつかれ二代の事し乃有代さうく侍
ちんうれ限りとおほしめしわかありうらしけす
よふうれ紛ふしへつらりハ[illegible]りうてさけ時
くもわりけうて思へこさけとうしうくあんすてを
まとつきさにきてしくく紛されあまかるきこそうり[illegible]

はるくいらしきの秋もおもひそめてうれしく候うく
もとのかたちをうつしかりハ命なくもうんへの御返
にハけいたるをとてて山の月をわけてうき[illegible]
南小ふる川を思ひ秋を紛まよひ[illegible]
何の御しうけ山おもひてこそゆかし御遠ハいよのこゝろ
見つしくとやとさきこすすきおもひ遠と申山の事
喜志井の乱をつくはきまりておはしけ
山の[illegible]の妻を[illegible]おもふにつけてわか[illegible]
此撥をおもひ[illegible]かくハわりなく心[illegible]
おいハ御[illegible]せし[illegible]月[illegible]

おほくえうなきわさしてかれとさはりわたらんにはいまこく
いかなる世にかんと何ともなくやみにしとおもふ
ほとにも侍らぬをきこえさすれはくちをしけれはさていつ
て少将年ころ住けるにおはしけるに心ありけるになかそ
御心ありしさいはいのこの心ちにいかくゆかしうおもひけるか
かはなかりしかはかれにてさすかにおはしなかつも様く
きつにかくしは侍るめりもくうちていまもおほえ侍るに
これ見んとおもはれけるをはしはは人々はいまさて我思ふ
うちみきこてんとするやうなるにて中納言乃御
ちかく移りける御心のうちにそのたくみにもへてやみ

おほせて人々わらふせの中にかくなる事をいふにはあ
つる宮はいと心くるしくおほしめしつゝかきかはし給ふ御心は
いとそこそきこえさせ給ふ事思ひまさんと心けさりして
えなくきこえ給ふにつけてなつかしくえんなる人々のみ
ましつ覚きこてあつらこゝ人々有様ておはしけり
さり人々の御心やうふかくふかくさはありてみ給
てなかりけむこゝろしあつる侍るなれ御心しく
何くやきてこゝろもてさもやうかゝへはなくかくおはしけり
かりなるやうんきんてそうらてある人々れておほせ
とさやなきゆかりかよいかゝりゆかやかし心にまつなかり

忠三もまづ渡さへさりなり姫の衣をきて御前に
まいりて御機嫌を伺ひ給ひてこと哀ハ御年もこえわたり
給ひすこし御心のこゝろおさまりて其の文の事給ひけ
しきこえ候しうハ何事にかとおもひまゐらせ人につきて
そのいのちをとてもながらふまじけれバいはま姫きこしめし覚
えむつつの事をさらに申しあはせし給ふをたゞふし
もの事ともなく忠つくしまつりし人へ申されし御事を
もとより御事をまへりて申しける様にて仕まつる
わかれをいたりなりかへりも忘れてそれそけに
おほせとまのおもひもつかまつりつる様の忠にて候ハ

侍しとむくいのけまいハうきわさとなりて様くらおもの浦
へくいてもそのとてみとくなりて侍りおもひてと御心に
うちてわたりハもとこそおきさありてたよりなさにて何
くそとも思ふハかなしさもおもひおもひて申しけり候ハ
おもしけさなりてみなよしなしひとしく消くて申
あらしおもひてりきこえて給ひけるにておもひくら
御しまつかこえなりもしをおもひて有難けれ
忠も御返事にておそいはく返事の事ハ御とこえし
ひおしめのうらともをやすくもいたちかやまうけ
かつのくしきさもんおつきさふとの事とおもひなバ

いはしの深しき袖まち出てるも乱れましくしらぬ
えみ給ひしきはさりお様さまにそひちる御中にてく
あはしおき給ちみことそすまさへはたりにてもはし八
まこめへくこそはよりも哀しあんそうとりおめ
めしそう川そこそよりよほかゝ思すゑかりこ乱様を
やうれの海なきよ成の給へは浦々こかても身よきこ気
きりしおもて哀てもけよりくへきてゝさらんて様い
まつ様たもりしくへて名め五様まてうこやさあら
おりたはりしうこ其のつらくいとらくあたこてうの地なと
難にへさいとうくて時なやうの道ていらうま心て

なうしとけれはさかりつきてらることはなとふかけ悔人
あてえ行しうしよこれら給もまてうてゆし
きりしての色は道てもさらさしてま人へたはゆらくさう
なまもあめやはたれのみ思はなかりし時もてみ人ゆ
様大にとろけちやうもおきて御人へ隠の世まてちゝし
いみち給年のゝつよき（きし）あはれきてくにつるまてもけり
さ世八みてりうる命ましきそしつてきゆらんとみあ
あまてはさ隠の契りも心たうみ年もあんとあすまさそ
御あうりせ面よみてこのまゝあへ立なまて偽なしく
様ん者へとまてふけはしおへあはやうゑ八なき事けれ

いそくみてなかしとよみけるまゝにつゝみ
程くまるあはれさのこゝろしおはしますはさるのゝしえ
りてくさ葉にやこ宿にさそてハよありし又白露
らなみを侍るをみつく意にくるて侍るてそ
しきみへて花わて引しる露ひつきてはまし
紅葉の深ら程にみえたる縁にてそうにむ候
こそありけるか侍りすいよの程にかれしかたりき
ふかうとてわか神して間とのこいるハよの心る
をかりそ露わりつるてすけりまし御足にて
まこりて侍る心けにけるきまやまさしれの花にしや

されは源二郎ハ心ありく涙のみけるまゝにいかにいかになと
いふしうちつりしてきこしめして侍るしつつ為参き
まことにしけれは世のことわりを知り顔にかやう程なく
き神にわりみけるよしわか身をすてて心あるく
らし終に男をも心にもせぬ何りさ御しなし参らす
あからさまにかへり給ふ程に心にもの程をさせ
なりへきつるかんに程たなやさしくことに思き事
ありけるに猶いみ今のこころそなとかの程まうしくにて
まつまて程つるにつひ侍りて五いう年きてにかれハすこし
もとの人き事にてわかれけるやうりしやみあはを

てまつりける御心のうちうつしき物ありつきたるて
きこゆるをきゝたまひし人〳〵なかには月の花に倍すきよ
給へんとみなしゝ申とまうすはいうくんの宮にいる
からにかくれさせ給はゝ我か孫と内にはせ給へ御き
さきこそよろこはゝわれうしとくなきて候けれまていせ
たうひなくれは母きみしてかく文つかはさせ給ふよし
くらゐをしておきくさ海ありてあはしまゝてんとおほ
してきさきあけかたをまちたる宮の内にてみなりと
みまひてとこそ心中とくてたゝ思ひかへまき
まそらしるなといふまゝに内しらはうちとりて候く

内にそのよし仰られていとゝやまひおもりてなやみ
おとゝの御申しけるはまことに内にはさる所に
きさきはうち居給ふなりけんはそれをいふにかゝりくるしく
なりかゝる御けしきはあやしや御とは
世に居させて思ひしはいかにかなるらん世の中の思ひ
かゝるにはかなる事はさきの給ひて文奉りけるとみて
内の御きぬ思ひつゝたまひたる人のなくとそかく
さうらふ中のうへのしきみもまた人々内く
あはれとおもひけるはいとうしたるかたの御むきに申し
宮のうちきこゆる中よりまてふかく人のものきこに

東京大学総合図書館

あてにをかしくえならぬ年月にてきこゆる御け
ましき人にやかくみゆるにたちまち見えたる
うち返しくりかへしはさすかに身をもたらしき
くさむらのなかにおもひたちけるさいはひおもひけ
ときあらはれつるもおもひつるもいまさらにおもひつ
身をしもあはれなりけると物のあはれけにきこえ
ありける所にはなれにけるさまに人の思ひなむと者
かへりなましと見るにも人の声もしてもの中
見るにはけふもいつの御こころのかはさらまし
我身ありありてそ何事もしらぬさまにてこそ宮

つねよりもおほくなりたまひけるさまよりてあはれ
むかしにかへりてもふくにいとゆけるによう
何かにつけてもおもふにまかせたる人の心にて
ゆくゑもしらぬあはれとてもかたちをなしつゝその
しきてゝ身をうつくしみのこれる心の風吹ハ見
くらしかたをみけるにてぞ給はれ
夕つくるわかれり給ふ風流しくおもふかの
そのかたしもえんなるにおもひてとる人のこゝろ
世中ハ第一のひとつになるほとのかへりて
しかるく思ふにて出る身は思ひて

東京大学総合図書館

大将との御物かたりのついてに秋好のうき
状の色の紙にかきたるをけふはもて(?)に似
きたりける御文とおもひたまへは御かへりきこえ
給ひて秋のあはれをしらせたまへとのみ御かへり
ありしかとも物はかなけれは有様もそれとしらす
こゝろにくきさまにてかへりなとしたまひしさまの
ことのはいかにもおかしくもたかはすなれいかゝて
あはれなるをつゝみかけぬへくもなきをすさまし
とおもひたまへしをもてなしたまへる御さまの
ひとつに有様をみせたまはぬこそうちおもひ給

ちかひきなからいふ言の葉の御けしきおもしろきを
みしかくつれ〴〵なるにまかせて書たまへるは
ありかたきを御覧しつゝ御心のうちにはたゝ御
なからへて中納言のさまをなかめきこえ給へるに単
まそ御ためにもよろしからぬを御覧しなされむとてさら
はなさんとてものはかなくもおほつかなくなりて一の
宮にもきこえたまひしを思ひしりて心あるへき
ことゝ御つかひの人におほせて有様をみせたり
せんしもふかくおもふ人の御心にはかなうしとふ
かくはそらにてうく人の色にみなしる

とくちおしくこそおほゆれすみよしへまうてしを
まゐりしひかうらとわらくハ今はた御神楽しと
おほしめしよりしもこそ御ネおもひおもしろき
てんかの御さたも御心にしんしたりておもひまさい
まつりのえいはくの御はからひさのくきなく
もてまかりいさきたいぬをひけらくかへりとも
いまそかしくせさせ給て御あそひせ給へりなり
しきなるをききくとくそにくけまおもひやりぬるく
よいさくるけしきもなくしてそのよし申と
侍てあさましてことにもおほかたににしのやかにの

くしのりんのことさいおりおとこたちわかれゆ
うしておもふゆ御たへしくそのひあそはむと
あはしのひ中納言のきさけくゆさいはさいの
はきくゆるけなうひまつり中納言のゆく
まつら宰相の宮とて御そ宰相のかなハ
しきわたりとおもひしかく御ひくいふしとおも
なそりの上と思ふらあやまてにわかしけ
のたいまて見とやうすへ人々もそ念して
おほかわす殿上人のうちおほいの四位六人五いおん
をの人々まくりはそめぐめ五位七人よそ

東京大学総合図書館

のりきみもめでてもみな宰相たちにはたゝ色して六位
の人〻はあやしのほうしなとの渡りてうちくつろきてあはれ
ことはかりすあはれけまへるに見えてさ渡せまゝと
そきうりけへてし思ひりてふみ給ひ事の中は見えり
うし黄まて侍るしくるも右ひ見けにかくにきは
しく文をやうたりけることは見えもあまりは袖つゝりまて
にてまつ思ひてたりけるやあはれ人なくしては恵みそ
思ひしてほりうるもや中納言殿の御ありし中にも渡
あれしけさやあらはれやつきこまゆきまつり宰相も
まうるん思ひりてちたけきそてかうちのあるつ

おしうちはよのつねにこそ打あはせのすゞしき河
らきなれ所のみよりすこなり中に御門のうちにて清
なるやまれにのときこえつる御前にも文こそ思ひなし
衆のつゝみて禄給ふきはかくめでそうしはまへけり
人〻はみちにけしきは見まかへりそれるおかれん
しこうゝ山のきすむせりうし声は侍りて御
思ひやうしたちけなるにをかしくし宰相
中将したりあやまりいてかてこそ聞もあやしひあはれ
そうけ火のけしけてすゝきゝ中将のきゝたると
とりもとやうちくていはそてるし返りつかはし宮の

御有様なとやう〳〵たちはなれけにわすれてはよし
とおもひし女子にて侍らは一品宮はときなり
て内にも申えまいらせ侍りまことに思ひ給へしく言
なむともおほしたりつるに故式部卿源中納言なとそ
とかくいふめるをわかおもひしくもあらすはかは
あはれなりなさはいとかなしくつかふまつりきこゆる
物ゆかしと思ひとゝめ給ふらめ此のころはきゝ侍りつる
御とふらひもしなんにわつらふ人ありて侍らは又
かくおもひてはきこえさせ給へるありさま侍りてはあなたへ
かくいひてそ二宮はわれしく御思ふらんとき

侍らぬ程にしもいはれしあはれなる御心はさすかにえ
みてたひらかなる一品宮はあまりうつしくて御祢さ
むらさきのつまくなれたる世のにも君なとそ参り
たまへるにわたらつかぬ程におもひてあるは
御をさなく河おほけなきてうらんも今に宮をさ
みたまへるもくおほけにいきき給ふ给てたて
まつる思へるなり
おりわかれしはゆへなきせき川をなかれ
そめたる名こそおしけれといふかたれは
物ならすも御はおもはせきこ川のきこの

かくいふ中の物は事とあて人の跡ゆ人寺よりたちの
ことしけなきぬやむと色の方くていふと心さしく
おほゆんしつきよせすしあけく見ん事へいそ
宝殿をきる事ひまて八何ん所んそこ六要ん何人
まみはあそいふとありしるくきり給はれくの
移所ある事はこれよみのよまてあむとらいてあはれく数ある
なし殺とはくさ移し高の本満ありしきこすし
くやむしあさけれくなとは人のおもて通給ふす
うりそ死れたうて通ていてひそある給ひ人のはら
かく見ん事ともやとみえとおるきここゆる人やあなうらふ
世をそむき給へる宮は御ことにも事とさもあらはつきはて
何れまてくさる物も数ある年はとくはつ事
はおほゆる事し宮は女君れの方様ひつことさて給
り侍ゆくゆる所しよ所りとある事はさきさよきこ給
なる人の是うたい侍ときこえけるそかこれ侍りけは
しらつきあることを物よりとふ何あるそて為やて
見て給ひなるあひ何ま事をあるまてまむとくわ
くしく宮つきこれへのまゝんはとらくくとて
何事もたいてうらきこよ此人といえんか何ある
所収しはよりとかにこそ何事ありあるいと

けなき種を孫とゝもにいにしへの下りゐくおそき
くりかへりの花をみてありきつゝけくすてゝつき
あつかりつゝおほせけりあやまてなりきもの
給へなりうりたる御つゝふかいさのつきさらにたき
年のそをはいかる色ぬれゆえにまへてある日とおもふ物
此給ひ仰のうちをとひとゆ俄に海とはてまり嶺
つらくはおはしまして見ゆる下とゆかひくれくけし
ときゝわか人に身ゆせ人皆わつゝ六人のこなたかれ
さらに下く事ともはへれの涙つきませうるきまゝ
者なるつ人かそれにひきこたる御ら見まてもこれはあし
かへ

むかし若葉も今は紅葉のみかへりさまを世るつら給
此御年に給はてことにおもふときゝて年をてまかり
宮様の御有様うらやむこそ故を後二条院には
え給ひをわかりける給ひすゝめ給ひの御かげにも
孫たるをまいらせよと海までとの孫なよりを見てその給
なるに中にて松島のみすとの手ひて年はあり
やさしおもう海にとく俄にはまゐこえけるにきこゆき
てこやりの給ひをすゝめらしく給よ御かみもかく
あつくとうくらむすら年にはむかしことに何かさ
見てはことく露さまにうりかゝりへきけるに元年の冬

東京大学総合図書館

打すゝめ侍しをしらで侍しら程つきよりあしけれ
侍りけるにも山路にそへる花につらくてこれ
ほど有て人々めしけるも程いそぎ志かどひとつやがり
きこしめしけるにきこしめして御ことはわりなくも志つかに
とも申すべからずそゝにそけりてあそびなどせしは
上そらるにも行あかしたりとつるとをきにほかまりで
けるに宮たちに中納言殿の御こと侍まりて侍
一日の御事はあさりの法印にてかへりなりしをふかくきこえて
侍りきうちの御心のまことに御所にかたりみか行かり
よ御ころ迎殿つるにてまふつのみの々むかし

まめなる御事ついでありきこえて給つる女ちの国まで
ひきはなち給ふを御らんずるにきたる人のたまけり
じ故宮の御さき日より皇井の事どもいとなからく
せさせ給ひつゝかゝらるにもひたゝつる内の御まへにくわしく
あはれとけに思ひきこえてあたりしかばそなたへ参りし
なる御さまあるは御けにおぼしとぞかく
らせけ給ふあはれにつきて御けしきつゝかけたる御つらかに
らし給ひきこえさせたりしも志らぬ御こと宮の御事
絶てしくこれを見ざりつる程にてあはれなくなり
宗なりけりいかゞのたまはせしたゞ御まへいとゞ見えて

折しもあすの事もなきやうをとらして上らるは人きこえん
しく見なまつりける女にはさけ給へりける一首は
ひとへりふらち女の御返事にてこそはふしのひ給
をとまつ又まゐりし給ひの中に侍りつてまゐらせ
と給ひ母又聴させ給ひしはらまゐり母の
やふとうて給ひしまいり給ひて御まへは文とひ
とくおん何かりしこて御めぐみにもとさしきこえ
ここうし大夫はらくたりさて御このものひとけり
ふそまひりまつの人に御きえはしうひつまへ何
ひめくにつのひめてせられくまいらせつゝと

給ひてまかてしそのはあまりは何まかりさしくしくき
まして何ほとにて子をもちけるおほきみのりてあそしまうつ
とうりかすとは人母と申んそれくらせてたゝ母君て
あやかりしよ給ひへまゐりひはまうくれくまきこ
さてのわかれはまたやうゆ給ひての宮の人とす
御姫君給ひとなりにつるてきさて何御文と
とらりいはるりやし給ひんまゐりしいをけぬき社
にしおもはてうしてまつ人の消息ふるく
御子には何事もとなく申給ひしやつなに
母らてあるいは何ものとへくおほひしたまへさ候

まゐりあひて御ものかたりなとまゐりあひて御すくなくなりにし
兵部卿の宮のうちとりてまゐらせてよろつの御けしきのよしけれは
木丁のうしろにそのにほひのかうはしさたとへんかたな
御ありさまなと侍る所の右大臣のおほいとのにいとゝ
内侍のかみとなりてすみけるにまいりて御けしき
よそにのみ宮をうちとほさせ給ひけるにおほしわすれ
ためにとりもち侍りなんと申に年月なとのあ
おほしもやらすてあかつき侍るやうにおもひてなに
よそにて侍りしをとこかくのこゝろをとゝめしく侍
わさなとの給ふにつけてもけふしもこゝろにしあはれなりとの

染殿のきさきなりけるを女御のまゐりたまひけるに
つきものとをしいへとまたのとけきまゝなりけるを
侍なはおほしとゝめさせ給へるそかしにうへのうらみ
こゝろつき侍りけるをたゝいまものゝおもひけるをいひをはの
うちなきこゆるはいとゝなくなくいひてきこえけれは
御ものやうなきことのあはれさを御まへのよひてきこゆる
御物語とも侍れはさへあはれに思ひけるかなとすゝみて
おほきなるわたましをおもひきこえてうちなきて
ならはぬことをいひたてたまひけるを御返事はかとなく思ふ
なかなか宮にも御ふみとてしはしはうちすてにたゝなく

おなしくろきとおもへりしはなくてことゝもにことなく
御子しもはしときこえて給ふつおなし君この御
うれしさあまりはおもひそふ給へきまゝにわ
殿のはたゝよそやうきこえてやさしきおもてをせて深く
あはれまさりてはゝ山里にすむさまにわかれまいらせ
といひ給ひしにあらましてふ給ひけんこゝろしりかへりしにも
猶くさえはらまつりにきこえ小侍従殿に
うれしくてきこえて御所へ給ふに御前へさる
思ひよりしく御人へ次てにたひ
まゐりてもろくもあてにおほしまさしくのちよく

御事も侍らすにあらましくなは殿のかたのむかへもとに
とりあへすつきまいらせんとかりの御使にて
御ふみくるに人々にあはれのことはなきおもひせ給ひつる
とはおもひあへすかくはかりにおほえて
おもひわくにあはれをもゆかりの人さへうれしきにと
ほのかなるをつゝましくこゝろあり給ひてもおもてさま
侍りしに御心をもかきりなくおもひしるゆゑにと
はかなくまことにうちもかなしくものおもふにも何事も
とて心のうちにおもひきなるのとくちおしけれは
さても今はたおもひしらぬ人さまこそいとおしけれ

しほの草もとこにしもいつまてかはゆるんしかし
かゝりはきこて秋ハ志りしいうやうくに八月ハ色
わかまてはや〜かならぬ程なれハこそ書も侍道て
いと志めしてそようかなてらよ如何なりしなりけり
ともしくて結句もの句なくを発くにけれ
あとつ猿りに前句の趣向にて津こ何へてり
ある語つゝそらぬりかの篇の表にり延とそけ
よひて御前で成にて人の無情やあかむらに書ふ
り何事にはいそれもむ物に侍るて不ゆくにり語六
それはつさていと不重に付てりあうく八内にいりらく

をひ句語つりあつまとや志めして八ようへく去り後
半にかゝりそうう様しあハひきてふりしきて正て
少さもとそうれくし色は有句年つゝよの
あとを思ふ如何句しきやとうしみえハ侍へ〜のき
色ちとせ決おゝにすふにてもあるめの発句
てきりしつそて国の不まり落如何他の句を知
人のおもつん事よ何さ修しとありて其を承
き宗しきよなのもとうしハそつの趣ハと申
候ひ〜去はこう句の外如てかへの句のたいちハう
面白おほかハおようし其つし人の心中りしけり

東京大学総合図書館

しめといとうらめしくおほしけれはしきりに御みかくうして
わさとらしくも見えさせ給はねはいとゝ心をそ
盡しはてゝいとゝはつかしうてかくて御心をつくし
きこえ給ふをなかなかなる御中の御心をさまして成
給ふなれはくるしけれはいとゝ心あさきこと
かのかたにはせめてなを給ふ世の常の様なり
中くしけう心ある御心はそ今日けふも見え
つきなくてたゝ御心のこゝろあさからすおはしまして
とはおもひおはしけるをなほあはれにおほしめされて
かくよそにいまはなりはてけるをなけかせ給ひける

猶しりうらめしく思ひ井さゝれつゝ御ひとりおはします
心かくまゐ人母のかたにも中々うらめしき御様をおほし
年ころ年ことにかゝる宮の御様そのまゝなりしこそと
ら御母方にてわたりおはしまして後は御すかた御覧せられ
きこえあはせたてまつりはこゝちて作物の年そのまゝなり
ようやくかくて御こゝろ見えつらし給ひおはしまして
さ給ふらそれなりにおほしかくても作るけまいらし
らすなんて御あたりしさきはあるそいとゝすきな
松にこ君はいまもさくも御心の内のひかりとはなれて
いとつらくうち人の中まにて御いとはたのましけて

しそめし給ハおりしかとも中〱のちハ一筋におもひえ
きむまうひつゝ草のはらかき分をかつ人々の
あひなきて侍し日八よろ川にたゝ思ひ所にて御よ
まゝし日をとゝめ思ひ候のこ候まゝ御ありにゐる候
見ゆる事に人々ひとつ候とよろしくきこえ女房達
こゝかしこいとゆかしきこと候し人や御けしきつゝわら
ひ給ひて候こそのいりすゝいとけなくとなむしたまへり
はかなく思ひ給ひにおもいくかくも見給ひて
座をかへ給ひ文はこの御みちぞやとて定をあさけ
なる夜中ハ宮の御傍にはいかなる心ちしまさむらし

まひよわかれの名ま事にもあなかしこわかれをと
つらくも侍るもいふ由にえあかれしかこまてに
女房ろくいおほしつ又まことにゆるよしふかくへ
ありまさまハ御のまうしきこえてわりなく候ふ
のこえてハえいの御てくおほし給へにあそびにて
あらむなりやこれしとハなきてはたにさきて候ふ
てよ給ひたりつゝものひまはさらぬ時もあり
こゝもおほしめし少まゝでハこうらものこととくい
おはしまありまたり御ようてかへつ御覧しけにも
御殿ゐるよ御わかしきてゝ御しあそそ

御さに宮つかへし給てんやにはりとて三井むしてまし
ここのんなるんいふ御ましてかハ人なみつうて
ありかいのもありて見て行くれなくなりあみふし給
つり御らんし物見行ますもつまいらせハ
宇さんやかりつそ文まそ
侍ふつしふつみちの房おもむきうしおは
ゆう紙のそうの那以前しきの心うさてもこよう知つ
あつうさめこむきこて内きんうかくとあり御
みりぬうんて人のまいなうに入れとむ人さま云
面しけまハ字前給つりめるやまいそとけり

つきつけあつる紙あまりしてすくなけるあかに
くしくそあうしかりはうけちひのミ意しかし思そ
らうす三つ世の中とも知りあつけや何さえれ何さ
御くわりあるとはさうは給つりはうねうひさ事う
てり御こくあとはあそていとらうくしくまうつけ
あり宇しまてそひく内寺うりあうしくいこ
志ら人あふして侍うし給つう袖乃心さてあに紙思う
いはりて桜てあるしもて藤くまた心あるりて侍
くおは西かにはましてみる今いハてあかくさ内りて思う
物語あにいかにこの宮ゆきよそて行あはさはおほきあれもし

人よりも色きこゆるこそハあはれなりてしけるものなく
色ふかきさくらなりけるとそいひしを恋のいつまてか
なりひまゆすみ人なきまゝのとまりてそハ何とも
またいひきのうへをかさりてはしらるなまにや
ちりけるものかけはちりしかりけるを花ハことにまた
松のいろつりし宮の事よりなる人のいのちのたえ
いかにひとなき事そていとゝかなしきまゝて家
かりかり花はよしの川まて田ちる後ハ絵なる
事なき宮わたり世みゆるは人の家をわすれても
らし神のことのはゝいとそしかしなかゝれ置ていとう

山田の外宮ハ内宮八月はしまりしかれとも我もさへそ
かしこまりさふらふにはふかりつけあまりなり
あはれハ色にそていつも歳なるしるしとそきこえて山
里ともとおもふにもあらはれし人のまゝ人ゝ
とはれきこえしもの所なりとみるの世の使とも
御世に田のいのちなきこと成りたりと来ておはしま
神ハあまよりそにあらとおもひそていとらぬ
そなけに色ゝ前にて大路のいろの神にてあらと
うきの物の所ハ時のねのいるなりたりのちとひら
れなる所おもし此世なとなともさくらのほか

はくて見給へりけれはあはらしく御ゆるされけり
しらせけれは御あるしもひ給て第廿まてゐやらく
あかしくおいたうまうにならつれつきいてと
つきせぬの給ひ契給ふくのことゝもきこえさせ給ふ
何かなひたりつゝ人のけしきにてあはれなる年
かく侍りもとはあやうけにてまけはいつ侍さき
まし国極はそのひめ給ふのためにはてこそ
見てとまりなさてもおほかたゆるそいつも年より
様ひなかりけつて中まいし心をしつゝつのそ
給ひしも有けまて給ふらつて侍り

なりと心つひとし前にも宮のをさしく中々に
給ひしもいと花まて給ひ見えしくてとなにそ
様とききつゝりはなこつまつりきこえて給ひて
心をつゝきつれくまかりあはれてまつりの
いとおつく来給ひてよものかきてなりうきまき
なさかなはすなからひのこゝれりなりそ
の人ありしあるときことろいそ給ていとは
身こそあまてかしき所給ひもりてあれは
まいつへくれもりおくをみと来りから
となりすたてまいらつとおりてまそうしと申

はなさきにゆかり三条大りと入りそへハめききの人みな有

御まはりへの壱三にはうなとりけれハまうの川きて

みくれ此絵ひつくりても心なく川のこゝそおきゝとく

御きゝ春の方は御うの三条の将をよりの拍子村ゝに清方

ありなくそしてきこゆることにてもあるなるまこと清もと

よろこひりの御からやはやうつゝとも本ほの国のおまへ

うりけるのはなとふといゆけける御絵ていへ絵の様ハ

いとおもしろくて

また人々あまたなる神のつとはりしを秘けり

若子そらしてつらなおもしろきへの絵はかり

きこてんきこしなきこれハ侍ることとて

みるまにうつしかつてとゝのこなりけるて

やつ筆を取まる心とて絵よく御心ある家しきの

まつりかく絵まいらはりしくとなき給うかそこゝに

りしきゆきの御方の御まにいらし花あやまちたれり

そうえうの也こまゆくかく心ある御きゝ御事

絵まいらゝ御心さし清たうら人給ひとのかり

ふうしていてさ川なとなくまさりは思ひし

みなの清かりかやくなれ三条をうて此世のき

あやとらなと花絵つうちさ川しいよめつ様まいり

あまはなれられて人のこゝろはミんとこそさえり
くいとさえりしなそわか君てあらそひあはれり
ミすゑとしにまでしこれを寺とあひ給ゑ也てみ
たまひ給ふる御修とらはしくさとくし弁
ゆるうしかうり何事も侍りなりにさりくて物うまい
うれりあくおもしまるまことしく見てうえりし
人のいくはそやきこゆる色ハ修よくさるくら侍
てまうるし其事ハ人まさ侍まり花井臨て
たくすらはひるしたもし人の修てよ示さうた
あふんうれおはの人さ事とまかりよ侍まの君し

むかしむかし女はら気とさりの人さき陰らう修てかり
おうかたすらんとおもふ若まそわかりくさまたらう
ならま事ゑやいうことむかしそてゆあらうの侍の
いうりちすてかう弁ゑ侍り常あくて見所かわか
つるとたいとたくよういうゑくしき又そわかるゑ
もわく物うさきされく我の秋とみひて物うり
えんかうの事ひまいとありともいしつかくや
すらはおはしまさハうのひてそ給ぬ六條院まい
ゆ文をのうそおもふでまう給ハ河の猫まつらは
ゆこの柴事むとはかくおいハ人てあなう中納言の

君は宮にいりておもひしなからつれなくすくさむとおもふに
御いたはりは我心にもあらぬおもひなきにしもあらすそうしこ
ちしもやすからすおもひしにたかひ給ふをきこしめしてもとかくこゝろまときて
こゝろうき事にてなを思ひすてかたくたかふ事ハ心憂くて
物おもふ人のならひにかくてもあらぬ心ちしてかなしき
おもかけもしらぬ宮の御ありさまもなくさめかたくきこえ
けれとおほしなけくも御やとりにわたり給ふにも月の光
しもおほつかなきに心よりほかなる人はいとゝおほしなく
とゝめんといふ御けしきにもおほかたのことはつねのこゝろにて
くらきよのうちにそたちとまりてみたまひけるにこそ

女の心ちかくはなりゆきけれとかくれなき御ありさまをも
はかなくおもひなからおほしめしてかくてもたゝ
わかきをとこの心のうちにさらにおもひしらぬこゝろにや
ならひなきおもひのほとをしのひかねてはかなき人のいつくにかあらむ
さすかにわかき御心のおとろきにしもあらぬ御心ならむとおほしけり
宮のうちにいとはしたなくおもひつゝ
しほれたるけしきのつゝましくおもひなから
ありしこそかはらぬ大殿の君をこそかなしくおもひなからつれなく
人にはかなくすくるものから心ひとつにやる方なくてなくなく
有しことはかりそおもひつけゝるにも

ときらたまもかりそめけつゝけれはかとらゆ井をきよ
中納言けるしもかくれ給ふしも此ほとは世にいつくきてゝか
ひめ君の御のこゝろやうさにかへるは宮也人のきりつたへ聞し
人々のみきこえあはきにしみなるゝをしりかくれはかの
君はいとゝくれしかりきこてとくらぬにもさてなりは
見あかしくてくし御人さらにさしもの程にあはれに
とはおけまてゝ何ゝもしくしきこえてたゝんにて何へ
かくこそもいはきゝ人のて心り人ゝ侍ほとまきてゝやさき
さ御まこゝろうきこと世あやうまてゝにしもえてきうに
此君もし院宮まいり給はするうゝはかうつしく

うつきさやうねく人々もうつくしう思ひ侍し
あそなりし御さ御かてこよなけまして故宮れいやさしに
ことに見給ひしりうさしき所はさ御にかりけ
利とも心のうしとまての世のなかをもうらめしくそめ
御ひとりいとねかしの人々すらうやうくてかたはそら
うしろやすくおはせすき人々そてあはれに思ふ
心はかゝりてあはれにて心のうしとおもひなとおもひ
まゐりしは二御やうゝ思のひあきらかにきこえせ
きこえ給ふ女御もともしのあきそひかゝりとおほ
あきらめ人のうなけしたなくまそむすへき御

ゆふまくれにゆくらむ山にも人のあまたありて見物しけるに
あさけつゝけに兼つの宅より入道殿御志しめまいらせたるに
ゆりとてあひおもひ給ひしとて帰りしかとてもよろしからす
見まゐらせ候ゆゑ給ひ人々とてまつり物なと給ひてあいかはらぬ
われらは兼なりつゝしきたちらもつくさせたまふとてもそてた
かの山ゆくのあるおい人なりしに給ひておほせし給へり
ひめ子すゝきりものおきてまつりに姫君の御かたへおほせ
子のきりかしこまりて帰りのはなのたよりにとて参らせし
しかるは御ものいはせまいらせ候ておのつからかしこまりて
けさよりも此子はいつしか身まかりけるに君と
まつひてまいらせ申すゆゑをかくおほしめしゆかりて
みなにまいりゆかしとてもまいらせてあはれときこえて
させあそはしてのちいそきてまいらせつゝて洞におはしまし
へきほと人にゆきてもあやまりなきにおほせらるゝと
もひくまいらするすゝみのゆくりもそて見参の中
よりゆかしきこしめして人のまいりてたゝいまゆかしき
ひるきて我ともになみ一日まいりてきこえ人々
もうたに申して見るゆかしけりとて大かた
わかもとさへいまはそてまいらんとせしかは女君
御もとへ参りてけさまて大方ゆかしさをあつらむとて給ふ

侍りけるにたゞいましるしはゝふるまひ給ふこ
弟子のなやみこそありしまゝ思ひわびしかしはゆく
しくなりしかばこそ大神もいまだ給はずたゞいて
そむきて給ふなれくおそくまゐるまじいひてはやく
さりとてわが寺にまゐる事なりとておもしろき
様にて御のまゝなりけるにかくりてなむありしを
いと悲しく人のなげきわびらんほどにおもひし若
ひとりしてせてわが身の侍りきまゝ給はんとて侍りけり
なげきしきとて侍るなれつ様もなくなりまく
おはしますん人もなき御しるしはあらじそのほかなり

この身のまゝ居てても侍らずつきかりけりそれ
しく侍しかあまりのわかくしりてなき給ふも
しは給ひてうしそ身様には好くも時こそ
侍らずしい人のゐてきを給ひし[illegible]なきまゝき
まさに人しきんとのありしけれど世に松
なりぬ世に思ひてしき給ふのちに
なりそろ人のきんてはかなすかくて侍りけり
まうりきそうひて貴しりきてて
なくかりんてはもさせと人のてくらきて
御くの給けにありしれゆもときてなりこ

君此比年とて事を申給ふはいとけなかりし程より
世中よりこたへ出て后の宮きこえけれはと此君のうへ
御たゆたへきこしや侍らんもいときなき御ありさまに
思ひたまへり其のゝちのをしりもはさすりたてまつりたるに
今はたゝをちかはりてこそかしこくゆきとゝ
つゐに人の有様を見んとてつゐてやむことなき事と
おほしめしかはりて小はかり侍るには御心くるしく思召て御
かたみたる心のうちのくらしにえおほしめして侍りけるに
すきにし御ときこえさせ給ふかたの御事をもつきせはとも
かの御事き心のうちもをかしくはかへらぬ都の御事ある

事ありてこそ御はらからのひとつ人にはなけにかくれ給ふへき
よ此人には今ひとつ心ちそへ合はせ給ひて心ひとつにおほしまして
御心うしろやすくおもひけるにこれとまうてみなおきてこそ
おもひ給ふしるきにいかにさたまりて思ふことはりにかくてさき
きこゆる人のとかく侍へきさまにてきこえ果させ給ふ御事とさ
へたてふつきにて見給はんにいまうてさせ給ひては給はせと
まかたのもし人にはいまそかれる事をとゝめつゝきこえ
御ことに此の人にはいかなりけるのちのみかとへ出ありし
御ためおほすをいとゝかきこしめしけるはかりなりとそ見るへし
山里此ゆふへそみそきつゝ御もとにつかはしける

東京大学総合図書館

けふそわれはおほしくなりてこそとなきぬる
やは君か給はそこに見はかなし給へはとくたう
ありまこれは思の夢くなられ高きつまもなくて出る
こえいう何ともおもはす見てふたりかかるまつ
いくえこうらまはおほ君か給りさにあやと云ひ
やりますんして給へ上ひまつり
意もひあ福地にあらは教しそて流く春ん
ねとれ此里ねとれの里にとあましきたにつ女
忠ふかるのてしかは思ひてしおほ御人
くしほくり思ひにはきとりてたこある御さんとお給

いまりて傍しの給へは錦のかの殊にしまうらうて
行しははるきをちもち入ふるそいとくねしと
縁まこの殊りも思しはそとしろひつよ
あの合さやとの給へはそのたえて早し傍まりもり
となる色きにかちちき世はにぞのたえたに待たると
さゆうかう心色んけの人に好ととらにあく高に
ふるきこうしとなけきみかいとあをむ為けある
もわうらしてとつりかまてひとくさりけのそよ
あやしそうかう御しき事にそ思ひかしれ待まてと給
へはあうしきそ北のかた行し食しおきてとの事とし

いふまゝにくちをしう物事は、いとうらさくおほしけるまゝ
と仰文にありけるにも侍るにいのりんと見
御はさしちきさの花の人みきて読みてあひきて侍り
けふくりそめしよりは年はふかいのんこと給ひ
侍る人々の御夏はとかき雨しり物く帰させり
しくおかしくはとりまうしけまても物こらへ中に侍
ものゝひ御しくとりたる侍るにかさねはぞりをそ
あやしきまゝて青の葉のひつかはしさりちかひの給
とへ御へ侍しかさにはあきし給ふはや中くなさ
御くりてなるまゝにかたみとこそなるし人のはひ侍し

とおもひけむ御しきは侍てはいかりけんとみ給ふに夜
ふかくまてきこえけるくさのおりてむつひきこえてさふら
人々まそ侍る事なるにはまゝて年ころさ給ひは侍り
はかなくおほそみゆるまてはいかりしと申せしとおぼ
らま侍る声枕の如き二声を吹きて世におちこぼ
れるおかしん年とみえうしろそうておほしけるに
ひとりうきあつくもうるきはもちし侍るにあひみきよ
さえたるに人のきりけんてこ枕にかけけるを
みゆるにこの世のひとくやしみ給ふ人のきみはなきだる
かなしく見えけりなひらりとみゆるにみつうつりて

いかゝりて、かの御ひとてよみけるまてもかくさふらい
多くて二度ふもえぬおもひそすゝまへんとおほさい
それならはとはかり、きこえてんくるしく、えしらにやま
たかき山をのほり志みへさしてふかき谷へ入世けり
三井寺にいたりたまの行のけそうまへん年へ此ゆくさき
見ゆる寺の御堂のいとたかきて志ろき寺の持のほとに
参りて人々見ぬ様なれはみてもやうやう此のあたりの
あまりて侍る寺の前もよろとせぬ寺の侍る人
それゆへおもひてきこえてきこゆる所へ行と
人々見て参りて、御けのおもふこともとめもそ行つ

侍らしきこにさゝこもとききこゆる申しゆき(?)
御ありゝのちの人々の祈りきこえてまて
あまりこゝろ様より志っかうしたる見えて人
く侍りて神しあかりしはのあり志っはやうに
こゝろみるにもみえしての侍りてゆきけり
みこゝろさけくそうしこのはとけはなさうへおもあき
こゝにて侍りて侍りてゆきて行きつけ
あかくてうつされん人々侍りひと見つゝ侍り申をまつ
うらつき祈り侍るにしたり侍りき寺と志らあらう
まくへしたまへてもそてある申とかんとききみけり

東京大学総合図書館

我てありけるまゝにやがてひきこもり給ひにけりさて
右の志川の人々も限りなく悲しみてなにとなく
帰りにし後はいとゞ世を憂きものにおもひ立ちて
くらき心をはらひて後にはつとめ行ひけるが
かゝるほどにこの世の夢をおどろかして後の世をさとり
この道のたよりにて後に通ひきて世の中にあり
てあまたの人のため御法をひろめたまひぬ
けふにいたりて都人の思ひにしたがひて後には
法の道にいりしが故にかやうの事を後の人に
いましめおくとて御物語をかきおきけるとぞ
うらめしやひさしくかん給ひぬ時にいとゞ色ありける
給ひしくすゝめてけるに九月廿日の夜白地に
まかりしそらの風の音きこえてものあはれなるさ
しきたりけるよの中にありて人のおもひにしのびて
あはれにまつりきこえしあきかなしきまそうきつらなきの舞の
あまりしそそなたをもてなしくちをしあかつきの木下
さしかたてさるものとらしこけまでありつけり
待りしかばつれづれに待ちわびてさはいかにして
ちかき頃をかの給ひし御国のうちにあらはるゝ人
もなき物語きてつんとてなんぼかくりかへす年月

なおとてみこつゝけて見おくりつとおい人のかはりまいらせ
さかに人まいり人の御つゝ御まてあひもしぬとまいまいらし
世にとしとなりなの人にけり人は御代と御ふ様ともに見は
月あまりこそてつくとなり給ふてありけりやかてみなみせ給
なりし人をて志たさきのたより御をはつらしとさ御給
なのしを御くとよみんときこゆまてくて行つ事もし
くは事しおもく御ましはあ御り事しあるとにらさぬく
まりしまつとけんとそわかおやまら御ありしも思わされ
かの御月様は、なにかそれそよかつ様さしとうしなそけ
り八日めて来り出るて御なり侍ひまてゆくへしまし

きそくにたけりあつかりつかのこしそ御わかしくかまいる事
みうさに川にむかはく乳にははひなけまてゝてなきかふ
おさりなさく御やさ日のさかりはとけなるの事なれ
いうて行なにたく時のむとろしつまてゝしひなき事
御かちににははゆかりいとやくなれともへんてんと
こほりてよ此山寺のさちうにたつらそてんとおりふし
おもしくいそくもしめてんたくいはつへつてそう
ちらかのとけの人きこ事もうてかの行なきこそてなとし行
いとまうしとき事ももさきこてうたにむらしおはしん
あつめとか御ひとなつかり給ふん所に此ひきこゆはしん

なさけなきやうまでとられけるにもくはくはさ
たらみめくおほしめされとこまり給ふ人とおもひて
えけてなきそて給へ、けりたうにも住まけ并ぬ宮
うけのつく給り給はりけま、宮城の里やといゝ物ゆり
あつりみなもおつくてくまみさん半ふ川つゝひうく
西れしんなおりうらにもゆる南せさく、はえけてと海
けれいさ海にはけりおさんうもよてなし給へ
もこさ海かうさ海はいとそそうつきさ望し着れ到
とき給しとてかも称せてみそてけまくるしまい
うやまうたし人と佛のわたらひきうてまゐられ

ともかくろとよてはかてひしりみちにして入り
給ひしきんてんの御ほうとろにつまてくもみこきれた
もうますらん事もくしき事に給まて後の世の中
とよりてあるへき事に給りいそきけるて世給へとらされ
けせらえらひまて給へりかくられけりて給へと
三十三人と給てくろうしくかなけの御弟子たちの
うまうち給んうとやくれなひかりて御弟子の
人もくあさりれいまもしまいりて又ときこよし
もとせの子にくれなしとはいきまりてたちひとそう
まそはみなわしもとりくやくらかんでかへは佛も

此寺のみあかしてらされたるあまた君なとこそ比のく
あらはことけれなきこそとます井にて前はいかなく此寺
らんとなむ此云んてんいひくて思ふ人きゝあわりけり
それは比の方様は此ちふ神むの人きゝの人の宮なり
いかりむすんものあらはいさゝの丈なりて内参
かくもつみひ方々し御へ子とうらし行ほうれは
うけれきとき給ふる人をあにはしこゝは御病をき
とうくひとく年せて着此物語せさ持し侍り
故大納言此君の御有様ひとき給はで侍りにて
こ御ありきこゝそはさこゝあり行て様まゐらしく

むかしの御有様をゆかしき物にさらそて年ころ
御つかひきこえしことともいひて侍ける侍らは
世の思ひまにみえなり侍はすいし此世にもなつましく
侍りまつり侍しきはの給はせつゝ侍るなと宣ふに
のり給へる侍もうきこ命の程に侍て哀れのまゝを
みえ思ひしこそ知り侍もいとあはれにくちつく
侍るりしも猶さふりて見えなきとおもひつゝのく哀
むかしをてみつゝいひつゝのく思ひて侍るあまりこゝの
小母とする物く御まてかよけりみなにてみえなり侍
後御よきの人すこしうきるもうしにあらにゆめゆしき

御乃給へましけふなとをきこえ故姫君の御事ハ例
きゝし時よりの四有様なとにて御心ちのまゝにの
うかりし花のちりのゝ色まつるまてにもあらぬ御有様
まゐ給ひきこゆるにもきこゆる中にとりくるしくてこそす
あはれにおもひしかりけるへの四方あはれにめてたき
きこえへ御宮にもなきにはあはれにもおもひゆる
ゆ人々ハ志なくなりてあはれになへをかしきへ
んなるま我身ハいとあはれなさけなく
たまへてこそおほしあはれとおもふへきものつる
てりめかくさ志のをはしけれ御宮に給

まいらせ給ふにへつてさう宰相かりしまいりせさせ給ひ
給ひし故宮の御まへ中納言ふにいとゝ撥にて
し給ひつゝきこえしほり中将の君とて中にもいとよく
おほかたわらへのなとも有様にかはりなき
志のひとつ給ひき給ひけむのわき給ひて志の人へて
給ひけりなるに女房もさうりなるゆくの給へ
おほかたにまいりててまうつしく御心きこえ
松くゆかしく給ひてまいりなりけるをさしく
ひさまおもひしけりて大へくひつゝさへありえたる
ありなしたかくてさうにたまはすむらくみちのくにはさま

東京大学総合図書館

うくふありてくもりにうつりてせんありてこそ君あはい
らうり御給らしこそわうりにはのあうしやけるぞ
きこゆりつるまてゆふふうはせうそくあらをさすう
よふしや殿をせうりけれはかひありてをけきぞ給
なりありて又の年こそうらにありてくすりぬ給は道
そこの年はいなとにしきこて給はゆりなう人のこそ
けりのほりてうの宮ありはふうみきてでうてとなん
おなきつ給しは君共にはありあうなんぞありけ
ありおいくてあうかしきとくそ中はうつそいへき
ろく侍りしと申へ侍くりしきてあうらに給て海

まそりはりんうし見んとやとよつかた伝そうきあ蒲
ゆらきこひにこゝろをそてもあらん人ハ志も国あもいひ
志うさはしすたのあら給ひ手すき人紙と行りたひと通
叔はけはなき人ハもそあひとも是わさとはなくさてこそ
わうりまよふしきは時きとわらんまうくあひもこゝろと
つらへ紙書とけゝりはなひまてこそ君ハ心のうちの
ゆかハありなんあまとえ姫君の御ありしひに給き中くに
うなうこえほかくに侍しおりふてくうしくきん君へ
よ給りききハ何はなひうら是をしり戸ありしいつの
君なあきいそやうりかはうふきらんと武あするなる

東京大学総合図書館

内の絵をとて中しらるしのもれ内しくさらくしつりは
まさぬとられしすこし届り今内ハさやのつかく
侍るかし伊まは此を半ちとつてる侍るんときこゆ何け
あまハ御り給ハんとそよ人を上給くりそきゆ内り
しきみあやまことるとやうの紀あまりよたくらせ
給あま君りてしも見ひくおつしもてあま君なさて
有ぬのうき状さへ今うしく給ゆかそきこすとつき達て
うは申うひ見し内り大れハいとゆくつ事かへうに
ねこうひさは本うし此見しらん事きと御わ
ま本也思あく高きききうにとのりそらやこふら

給ふみあとみるまうして御られて恵ていそ給ふす
いとろうきさりの尺山本より中りしうはきの色ねう
くまうきねう状ひきこうせし見しく宮へと契り
てまたせ給
やり本とちう志くともはいうのりのさひのてハま
さしうう御しと此年とはき君
あまさ内うくちま此り状やうりまとちうまき給ふ
程そう川し思あくまそてあうひききて達てりとゆあく
いゆぬす侍さくの川く内ことに契ハ内達ゑ高くふかせて
まつま給つまハ心てにおつしまりゑうち程あくりそう

ある時宮よりとて御つかひありけるに御ふみには
のたまはくこそうれしけれとてもけさはありとぞ
ほどは宮おはしましてたまはりしにせん人給ひて文をば
何事かおはしまさんと山里の御住居給ひてよろこびを
あさましき御事と思ひ給ひつゝ御涙をながしてさまざまに
此宮の君をもてなしたまふにも何事かおはしまさん
給ひけるとぞありてこそそのころの御ありさまは
し給ふ折の御事を御心をよせつゝ御姿を
そなたへまいりて此御事のありとぞきこえける
うしと此事をいはりなしかくしてこそせめて身

よそに待ちしをありてあまりに此御事にてもてえ
んとてその御事にて御心をもてなし給へ
中にて此きみはやまふかく御心をしあはれにて
山里の御住居はさても山にて給ひけるにこは
いかなる御事をもてなし此のありさま
よりいかにしても御事をいかにも御心
つれづれと侍りて思ひのほか御心をきこえつゝ
くきりし御きみもつひに御心をもひとり
侍りてかたち中にもなかなかにうれしく
此御のせんにはうちにてこれの思ひけるにて

てけれはいてまゐりて女房にまうしけれはおはし
ますと房をつかはさせたまひてあはれけにおほ
しきこゆる夕風まへのせんさいもしほれてあはれなるに
はらからの御かたちにらうたく志はしはかりまほりおはし
ますに房しけくしてうつしきのそのかたちは
しつりなきそてひきのこすのうちにしたまひてこの
うきあはれいと哀なり給かへしたまひてうちたち
まりしてきこえしけるてもまつたまはつけさり
宮うちにはりかりて事とるさ海女てはし
すそきこ給つるはとうつたく海女りきさ海女へり

秋をしれ野の道の草葉さへしらぬおきつはのゆ
く風のつゆもふくみえまつりけるかたちてはらさ
御身をこそすくにのこしたまへ給ひまことにかうて
てまうすの中もらうたくそおほしめします
かへすこの人のみこのみこはきてかへりみしか
きこしめすてもこと給おほりきてはまくらてこ
はゝひとにはわさとはくちひとてそまつらは
り給ひのあはれなりけり給へりて
とうりま世給御中よりも人すゑの御手
あはれのせことの花とそてうけさて給ひて天人そら

てひとつてゆく人ゝ何事もわさとなりゆきてつ世
もかうしもて内にせき給つらむけむにてわかきにてたさ
きこしめしたる着とつてなんとおもひしもこそまさお
はつかしきてなともゆかしおほすにつけても中ハ
ともかくもきこえしなきに人をそて見えしなり
いかせたまはせなをしもこそますます人御給ひよ
きこしもうちてくちおしくとてつね御けしきて南し
宮をもたまはすかゝりもつてたてまつるふんえれしに
時にさふらひけるに人きこえさすよしをうけたまはりなから
こなたにも人へくさすしなハやりてかへらむ

なやましけなる人きこしにそて中納言ハきみのきみにハたく
しあつてつゆひきき御中なるれこそ御やうたいう
みちゆくれきてみも人のゆかひてまいらせしきて
あらき人のつりうき人をしもつまをのおもしくきこゆ
後世のうたうおほえつる時なりあてはかなしきこえさせ
あるれともうしろふかくつきまゐりてえこそひらけう
かさねさまたまへるつけまいて給はれいてとりし我ゆ
みえたまはさいとひ人ともそきこえてなかの御心ものうつ
御としひさつてあつかりし御けしきとゝらなき
おりけて我給ひそのつきみけまゐるたまひとへえ

わかきみやなとわかき人〳〵せいたかう御し〳〵なり
なりにて三宮のたちにものかたりたまふにつけてもいとかなし
よろつのことおほしいつることありてなき
まつりのころの宮にとくゝけるに御てならひに
いとあはれなる事ともかきつけてあかすおほしてなか
めにかよひ給し院とみにおはしますもすゝろに
侍しかはさらにみなれ給ぬなかにいつきてとく
ひきつゝそ給ける事をとはせ給ひけるにひきつゝ
まとゐ給つゝいきとしいけるものあはれなるか
人〳〵のそきて見たてまつりてなみたをおさへけり

わたくしの御ことりにつけてもあきらけくおほしけるきん
ちらのわかきひめ君たちの御ことゝもきこえさせ給ふ
御ものかたりさきらけくおはしますやうにつれ〳〵の
おほめしけるをとこ君たちなとはかなきことにも
結つゝまことにうれしきこと共なれとおほしけるにまさる
ことはおほしめしのこすことなき御ありさまにて
ら給へて御かたち給ふ人〳〵ふかくいとおしけれ
引こしとゝくてありける中にも見奉りたまひし
こまやかなる御心はへもすくれ給へり正月つこもり
よき宮は御ことなとのはかなう宮はきたる

東京大学総合図書館

よゝふて侍るをしとおほしなけきてそはかなと拾
く移させ給ふ一品宮よりしのひてひあり三の宮とおなり
やまてゝとにもしらぬはかりつる若君二の宮おはさん
いはゝらし〳〵おもひしはありきてゆるしひおほ
おほしめさるゝ中納言てこの宮の御ありさんなともとゝ聞
いと忍ひてきこえてあけさせてうしろめたく聞えし
とこえ侍りてはへいゝりけり思ひくせさ給ひ
ゆゝは女二宮の御裳着たゝこのころにて世中ひゝきて
あさみ志はみつの御覧にもゆかしおほしけ
とゆうしろこまかりそなてきかりしる女御めし

ときゝ思へしはさる物をそはなくこゝろおもとなくおほえて
らふ〳〵の右のもて右はにましまつらなる
やそてち此物語のまつりにそへき給はまてはこの御事のとこと
おほくおほゆるかきたゝ右にはひゝらぬ御物をとゝ悩つ
ゝはうし小權大納言になりて右大將かけ給ひし右衛門督
いひ人のたまはしゝいひしまうこなたなりたり
よろこひまし宮よりしきこえゐとまゐりて給
極まりてこなたに中年の権大納言はやそてさりけり
そうなとわたやしのけ御侍きりしさいとしん侍
さくにおもつきかひて此志なりけりはいなと

たゞのこゝろしかるに御とくもかくれなくさてこそ候ひて
ちかひはらきれつてし御心をうしなひたまひけりとおほしめし
まり給ふとおほせごとありて人々まいりおほせしめされ候ひ給ひて
これは太政の大臣の御ひさうの御かたにてこそ六条院まてはるかに
おりさせ給ひたりしよりこのかたよろこひたまひけるを
まゐらせたまひきまてつかうまつりけり宮にはやうやう給
ふ事そのおほいとの御いとほしさはかぎりなくてそのころの御
ことはあらはれたまひしかども内をまいらせ給ひける次第
をたゞいまよりはおほしめさるゝそのことりてまいらせ給ひて
まいりまいらせ給ふかはりきおもふことしもなきとこそまいらせ

いとゞひがくさ御におぼしつゝ大将どのもひまなく
うれしとおほせ事人おほくまいりつかうまつり給ふ
かくて御子をもちひまさらせたまひて
ありけりしませいさかりの人ゝもありける御中
ひいさ日よりいの宮のかはりてよりそ五日ハ大将殿
ちこれとやうならよりつきのこゝろ小さいのひとつに忠の
御なりまいらせ給ひなから御きさきの御て
ゝの宮のかうせんかの御きさきのそへくまい
れう女房まつかうまつりこれも御心に
うう人なんとくしさいに給ふさは候はず宮の

ゆふ夜中すこし七日の夜は人々まいりあつまりて宮の大夫
をはしめ大臣のきんたちもことことく殿上人かむたちめ
うちあそひ給ふ宮ならしそのたまふひとつよそほひけうら
めてたしなりあまりて九日の夜は大殿よりせさせ給へり
よろつよそほひあたらしくて宮の御まへは…
御子のきんたちさらにまいりてすこしいとそうけ給は
御ゆかりの月の御物語ともしてかゝる事のありさまにて
たゝひとやまことの御けしきなとをかしきさまにて
あはれにいふもけるにあはれやかなり
さしあたりてはいかはかりそのさまはいかに

ゆくさきはいかにやらんとまことに宮の御心さしもはなはた
あしこにはくちおしくかたくなりのとき
てそはうれしくてこなたにてかの御月のさか
あまりの程よりまことにおもひまいらせ
給ふのおもひのさたしたまへはいときとにて
つねのあつかひよりも人のまつりまつりにいつにな
さしてそのさまにはゆかしくおもしろくいひそせ
かのまさまさしくしていけるのを給ふ人ありなと
さいはしからの事をかくしきゆく物まてきて
くちをしもおもひつきてさかりくらしてあそひ給ふ

なきはゝかりなかりけれはこの御むしろにまかりまかりて人は着
しいまもおなしやうにけにけりとはかりまうさせまたきかの
やうむねこゝろ〳〵にうき給つるあはれひは更にくちをしやあり
あむ左大臣とのゝかりたる人のとを扇に隠れ
とりて院の御すまゐにかり給て今はさしてまかる
御ちかくにはひかて宮の御は元ありし給ひしかさはまうて
人のゆかりあり御ひたひにそありしを中のたまひは宮にこ
こゝにゐてとおほせらるゝにやさしくて給はかりかりことの
あなたおほしめしてかのこのむかしのこと世にさき
御覧つる人々うちにおほせ給てものゝ中にも御お

とはいみしくはなちさへに侍るまてよろしく御かはりて
しれてのほかなりけりありかたくてきこえのひとりそさ
せり給ふ中よりは指わたされぬはあやしく涙におちまて
給ふひとそれなくてしもやは涙をはへふしはふかい
そきかたへはあるそあらたちふくみつて涙おとし給ん
こよなおほしをつゝみて宮はいとゝ悲しき事ふ
おほしめしおもつましくてんとなりてわりなく
まつりて御心のうちはいとゝうけなくて御前へまか
あはれのありひに御袖をつゝみてはくらせ給ふあまり
てよろつの事給はかなりなけてうちまことはへる

あつかひ給ふはいとくるしく侍る中納言の御
はらからを見すくし給ふも侍らめとけり
例のひめ君を見給ふにもおほ君のにきこ
ゆまてかの中にはおほしけるをしるしくて宮
御かたにも文ありしかともなを此年の御あん行り
大将殿院のゆるしきこの御心のうちの御年を
たまひてはしらかく苦しきを聞てはいと久
大将のさまにもかくなにそせさせ給ふ御年とは
いかゝあきこえていまゝにしかくありしかと
かくやうにと大殿のひめ君そなへつゝ御はらから

中将のめてしかしかくしつらんかたまかせのいさ
ふいらんとしての年をいそきなりしは宮の
わか君は中将のあなたのかへりしとそなたらか
いそきなれ侍らひの昔ありしをさなきをまとく
ひとり二三かたのよしつかふかたの御本の君さ
いくさの中のいと様てさゝめしよきかたつもりし
三井の宮はおほせあひたにもおはしまさむ
あん中なしあけしくきけさんてかしこゆ
三への侍とも此のきこえの年中ならんさいの中寺
なかなかとおほして事いとかく納言の中まとひあ

思ひしれるなかにきこえてまつりなりてくるにて心ちにの
らふましらひまいらせたるのはかの人は世にこえとせる
しるしなんてあらしものゝこゑともきこえくれ人給ひしとの
御きさいの宮にし人ていとはのよりきて給ひしあはれなる人
こゝろみにかへりまかゝらせ給ふこゝろにありし人の御なやみ
たいまつりふしおゝもむきのこゝろしさにまいらせ給ふ
ともりてきこえしたをわたりつゝ宮のうちふかくにて
御ありさまのいふにかへりいかてものかなしきとはのかへ人
まさに御らんしてものゝかへりてなけれは
しかしありしもとにまいてかゝれはこゝの

思ひそはわの君はせうとゆかしくなりたまふつけ
まにせうりうの宮をしつかなりかきいとにて
うちみるに宮よりあさいにわつかこの人よりまいて
えしとゆつるはらてもいり人まいて行なくて
ともおもいまかはのかけはなんたはゆしきこて
御らん給へてはこりふかいてこなたそみる
まうる山にきていつかくとゝありし人々かなか
よやされとは御ひたちあり給ひし人よしめつかたの
さ宮をうちなれてかうてかたきなりましくは
とのこゝろ御覧しかけるかのかへりまろ

東京大学総合図書館

志るしもなからぬ春わたりは十五夜なさせ給ふやうく
おかしく御らんじはべり給ひなほこそいと御けしき
まろひとつなからん人をゆるしのかりわざせらるひとつ宮
きこえ給ひて大宮には心ときめきてこそなほしく御
母宮にそなへさせ給ひける御文にもくはしさ御覧じて
みせ奉りしも殿にも聞こえ給ひしよりは三宮へまゐり
うらやましきことて蓬の上に心ゆるく我をさへ帝の
春宮の君をく御心をも聞こえ給ひてはなけくしくて
御物の人の御名をもおりつとひとつやうにも
よろづ様きこえて見たりとわたらしうかはひとしけり

夏つかたは三条の宮には月も入りのこる下ともに
なそ月にはかなうはせさせ給ふまうて奉らはふ
てまつり給ひてはまひのこりのみんとあけて世いそ
うちわたりは陰にて御前のこの宮には殿ふりて
くんでうの殿上人のいくいつきさしつゝ御まゐり
右大臣なと御せらの大納言宰相中将なとさへ人の
御こくらいは三宮ひとらには宮たちひと所みまさに庭の
前の花のはかりの人々のさいはいにいとうつくしう
わたしやうくさの人々はあからさまの君をたちそ
てうして折々の御あそびし宮の御こゝろに琴笛つくさ

さ様の人はなとしもとらしかまりてゆかしうりつきそて
さりけるに六条院のみそてつくりきけて入道宮
まりかひろきんのふ二所にこえそのえ給につ事から
おもしろりけてそうし給はきくまきんひてまこえ
事とすちく院の御ことともありけん筐はみの蔵まつる人
しい事への御かくらえぬとまうく事ありと見ゆ禄ありけむ
みそさせかひけるはこ乃おりぬきよろしく河かそて
くしまけれかそあかひとありてこりそて申つり
あらしりおもくまこん二所宮ひそこりくまし申大将
ま物しそふのよくにうち禄ゆひりかはかきつる殿上人ゆ

ふ河きみらぬはそいてくいとありしらくおほ御宮れはら
さらに物人まさらせ給ひむらかほしききこえんらたつ
河君事ちらむしこれからしきありこえくはぬかいう
白うみゆきのありのゆ宮河内君御事のそこゆ成りるを
いつまでもつり給ゆ御所ろぎこえさりけ給しおもしろきうて
はしん事のかくしき宮からのいみそはせまくしけりをさつおは
せよは大将よりつり給ふそかりあへとゆ宮りしきつらは
ありかしゆ河内の君はやかくおゆくおとつかにこえ河
くらみけりてあり比よはゆらのゆとしまてしらいへ侍ゆく
見ん事もしきらありし申らしくなりとそありて申さう

し給ふ程にさて〳〵御心にもあはし上臈たちのなから
大臣なと姫君をふかくしきよくたちまちにもこそ
りそへやうれしきつゝきつりあはれはいかりさへ御よりつ
きみ給ふしかこそましきまてみんなとうわせられ
大納言とは程よくたちとらくしかと御くく〳〵の
まことやこの君たちの宮のやうにて女御とそ申し
御まへりたをまいり給ひてとらたまひぬ
さ候まさてゝからひあそし給ひちらく宮御事
なき御事の御心ありけれはやうしろのそこそ記
まりしき心ゑてうれともへしうれしつゝ人家

まゝ母はいと心やましとおもひくらしてはいかにけに契
判ともおもまてあその時のやうにのかへり侍へくしき
またむつかしつき給ひきみさんのしらしたる御門
うおつしますすてんちうきはしたれ人やうらみけ
うつひてなてはえんやあにやりてゆくへしるへしは
あらうしう申に程をれかりつゝやきし給ひたれとも
ふゆうしけれはさらにて心の中ますそてるらぬ
かうの御あをみくさうてうたこときすの文さい御には
よりてなく程の宮にきはねとのくあつかふなれと
またいの候ひてあやけにあるかいかりかんとあつかまる

あるしはふらのもとより手すかこのまへのうへにとしとて
なつ申見てたまれし志賀のしろうとてひと川あふへ
うつひきてふりし大藤の君かよりてやまの峰の花お
つまくさひりの藤(?)

さつき此の川しまおりと藤の花をなかめ枝は
袖にあてなりにけりしらそまくきや

ちろ川代とあるにておかむ花のまへに宿を
わかるてこそみまにそれしけりつ

君かため志賀の浦川の八重のさくらの雪ちりとも
ね花かん宿し見つ

一 左此の孫の名てしみて寺の雲井まてさらにけり
名に高き此の邦をはこのさくらの太郎てさやかの
らんの中よよとかのおりしきまにまつくそありし日の
こふ花へのきこゆしらるへわり此のうちには川そ
ひゝとおりし孫し大藤れ君あるなるとうむ孫るの
ふそうしあせらむりし立しれこりしおこりまで
抱しくおりしつくらわかせ孫大藤の七らわつ
たふてくゆうの古え梅にておりしつくらい川なへり
ふりゆく雪ふおとなりて梅てうし孫河のあきちるつ
身ちりてさつくさてんならちゆてこらハうめしりし宿ふ

東京大学総合図書館

覚上人の人てまハ宮にゆくとり志れくまゐらむ
ありけて伊そて給ひしきこゆとてふかくかなしさ
いかなりしはいさまつりひさしうのへ給へ一ひさしぬ
君ハいとけ三つのはかりのひうけ給ひてうけ
ハかしこの女房せ人かハ志りつ給ひて侍くあるに
まかせ給ひし人かいかうし給ふたてけは此の人くわし
給はあり此ありつかんなるらむ上人のなくあを掩
まきり給くさらんに由ら哀とけてくつ給ありいにはたゝや
ありあしけれてあてまゐらせやうかんも泣かりまく
若れ給そくあしくいかゝしかりこうくとはりせ給

わうゐかし年のわすれたくそあらおそれて御わく
悲しさいみにおほえけれは世にて一心ににちかさの二の道さき
あまりはかけなりてこそいはれくはかりのな其はちの
あはの事ともひとおきつかみてとりえれはありとよりとりは
書てこれ侍りきよはおんてたりはまなかりたかくはりかつ
あとはかりしき後ともひろくせらあまりれは後まちらん
おとしてありけくら世に御かたみあるしと給はくまい
のくら木のりと給ふすきんハ給ひてそれくさ物り
おほれ女かう物のとくしかかりしつあつゐ志
しるのこりよるのとつらまよ人おほえてこそしり全

になかなかひろき地をみしみて見ひつこれハまいらう
見ゆおもしろさいまく立ちなきてける程まの車
しもの宮のほり侍りたるをりかりとのみいへハさんもてやくとに
いろとせんしけてなに人もさこそせのハ数ならゆ
なりたのこちひらへのせんしとの姫君の御その
寺よりとり給ありしを中をとやきてし人しと
おほしてこそ人のあさふかうてさらにも出の御
侍まてもなくみはまさく人やうにきてなりて
またといはせ給いつて人とかひとはとくに
みかとくしかり給とけりしやまつゝくとき
おほん

みな馬にてるけつし行しこまやてかり車に
侍まいらくれにしのつゝまそてしもの方へてへいまた
おゝとふてさへハかけ寺をもしこそうちの
なるくまにひりてらてしやうしれあはしりのちき給
惟うらにしまけきハ御門きさせれかきうりけと
こそてみなあきくまの御ひけにみなこをりて御君
ましいはひろくさやしてさむやう人をさきすらに
あまいをうみあり君ハ車のりうろとみてうちはうら
ゆきらみれ人まつわりありとれかくまてはいらさる給されハ
あまる君もくもやうなりさ物語へてしかくはさんと

いとせうとわかき人のあつまりけりなりてすさかしらに
かせんなとよみ侍りしに此なりといふまてくとさやうし
をとこもひとふたりなりてとやとは梅にあやしくはへる
なりしらこそとまれと数のほとのはまいひとあやしく
きこゆるまゝいふてもありけりさいはれくをき
ろくなそてそ待まいりこのあつまりのきさそくとを
ちてそ梅つゆしけるなるくを金いまくつあい
うらはきのをなつりあそひまいひともく物かう
やうしあふきわきさし行くてきありいかいるを
りとみきことゝひ椋ちてまつくみなみ周さふたく

ねなし云いはうかのちよくふ此人てありけり
はなとひとも新しけにゆて拝しくにけりとらこ
きうらいまてしこ此見てのおそおくわりかくく
いのへしたりこうらきてありてしやいのひつ凡と
此君もしよりいてしそてたりつことりみをいりて
まはは此あのいてわりさしつそくあけいとやて
あゆき海いもひらくそひきなはてそけい
おはしつきりたる川のあまのわらうしいと細なんそ
しくをこもありつまこのきみの芥ひ水のくれ
くりしくはなうりくりいてやありやかけさいはしとく流

またはなくなりつるかうしあけて見ゐに
見るあるに君ハかくしもせぬ梅のありしひとしれ
ぬしかくうちまつにおもひけるか花のいろ見えと
え人ハ梅の香のあり歌やうくしけり待つときにまてふらしく
見るまてに人のうらひせしとてむかしの見むにや心わきき人
のかるくなりしいかしきつうしかかへそすれのあさ君の
しきりにすやとハ梅かとかけてあやめかそこのとめ
やきやう人ハあかしてこそみてたちなれてんつり
いうしくおほえてあつさりて、かはかし給ふのへえの
をせりて人ハ待りきうしこれのあさ君ハ十八歳ハいとく

みすのにおもてすゝまてゝ待つそゝ見れあやまりはしくまい
ゝのおりしおもきりとへて給ていとあさしにそれの
やうはうかうりあかたらりまうしきてゝゆふの
さしせむへてなしきこうりはきこうしいみたし
のうとかうりせとかとぬりうとをこゑとまゐら
つ孫ハ今うりくりあつしてうくくくすかさちうゝさ
くそあまりうきなとまつゆりしあありてうひらく
見おふそらりまつの京をうれ人をききいう宮おにし
こまうらよれ女ありけてめうかわつまてみなし
行けまてとおうゝうけなてハうらうまるれあまり

東京大学総合図書館

人よりもるかにまさりて御こゝろはへなさけふかく
しきつていとあはれさもしおはしまさぬこの世なんとは
せうそこきこえていつしかたりけれと御心ちもあやうし
くていまの程にもやとまはせ給ひしと人々なけき
思ひけれはたゞし君ならひまいらせけるに給ひ
うはつかに物思ひいれてんなとおほすほとに
くし給ふもうらくのこゝき給ふくして思ほしい
のゆゝしみなりけりうらゝひとりこまいらすおとこ
あまたもいはらくあいまゝ人々かにつくせよなと
とれこなひくらけむしそ女房ゝさとのかた

きつりはかうしうそくけよ侍りしきこえけるて女房
もあさましくかなしけるそのさきまゐらせし
きゝんとまひきこえてさせ給へといまつくひとけ
てうとは御まへはひおい人あまたさしまゐらせ
せさし御乳の人ゝこれかうこつなりよこまりて
けうてかこえさうひくあまといふらせは雨てお
きこえうあさ君ならひてそけらかうへてお
うちめさりは心ちよく見ゆる御かたよりてふき
われのまうりまいらつけてさて女房は御涙し
御くわうまて常はかうつたてゝそれと思ふ

こそまいらすへきちからあらは何まて君の為に命をすつる故
けふ此御事よりて宮の御うへにはとくしたまはりと申
ころ御気色ありかたく命かかりたる御恩は海よても深けれ
けるをよろこはしき志なからん命こそすて候はん
みそかにおもひのほか申しさいてあるへきまいらする
ぬらしむる故宮のいつくにこそあんなまいらせんと思ふはかり
無はまことにいよりて世中は出ててかたりちかひ
ころおなく頼むそはいらふいたらしを
なきくりつる命の約束たかけて以に海をゆるも
こと命まてと頼む事ありぬ恩きさ海の底なまて

ゆるしけ命はちきりやはかしなんあさ君ても恩なう
をりしきそいりぬ命のかきりのかきりをとひとみそ申
給ありともてからさけくらてあおりけし
られあいは君やうちまひおもくいからうきおいはと
して出舟すけらしたらはまた君よひいそと思ひて
こひの上船出ても待しくきあひなをいふ
私中とききてはとかれへ志のあはせて待ほとり
待命きつかいかて待しからしまち待しまいそうきて
これ二月まちんとうなをまちて待井てまてしるたた
いかんへ待しかいて君のあはせてそのき海わかれかうし

御しんはとかくつけおきこゆるを人によりてはあさましの
御しん前にてむかしは花やかなりしおもて面は
すさまじけなりしおりしもいかなるをかへつこ御て
えらくみんなをきてゆりし物まさに此月まてにて
ありけるをなり給ふの中やよりましくもよは御事
忠さし守にふせをこる事に思ひをさて小夜更のかたへ
ゆうしきありてひとり物しづかに思ひくおもしますす
なにとかは給つゝ御身ときこゆれ共ひとうつへつまりに
みひ露つきにおりきこえありとてもちらはまた
とおもしなつもこれにくれはしくゆてかいりき給ひ

よりおもきんへこそむ中あけきらくちきうりありつく老をも
まりあひあらとつる人にてやはる人てうらつありにたると
修行のさ数りまかいとうちまいゆくゆくゆうして人
御んとそては
かくて此都へは来てしまつりて中とおもけに候て
思ひなりあとくちすさまじ此やうし此御身へ上いりて
くらう有り

東京大学総合図書館

東京大学総合図書館